



日韓歴史共同研究委員会 「第2期日韓歴史共同研究報告書」公開

日韓歴史共同研究委員会は、去る3月23日に、最終報告書である「第2期日韓歴史共同研究報告書」を公開して第2期の活動を終了しました。

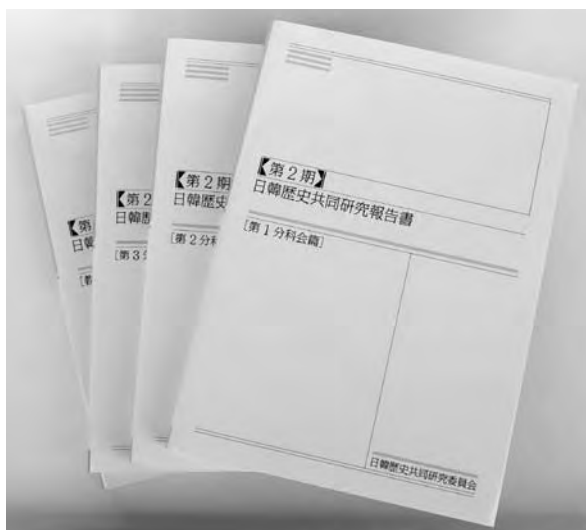
日韓歴史共同研究委員会は、両国の学者が共同研究を行って学説および歴史認識についての共通点を明らかにし、相違点を把握して相互理解を深めることを目的として、両国首脳間の合意に基づき2002年5月に第1期委員会が発足しました。このたび報告書を刊行した第2期委員会は2007年4月に活動を開始し、第1期の際の時代別の3つの分科会（古代、中近世、近現代）に「教科書小グループ」を加え、両国それぞれ17名の研究者が委員として参加しました。その後2009年12月までの間に5回開催された全体会議においては、各分科会・グループからの活動報告と委員会の運営に関する協議が行われました。また分科会・グループごとに延べ60回開催された合同会

議では、両国研究者の研究成果が報告され、熱心な議論が交わされました。

完成した報告書は全4巻・2070頁に及び、48本の論文のほか、学説史整理、座談会、批評文、資料などで構成されています。分科会・グループによっては、多様な研究テーマをカバーするため、委員以外の研究者が「研究協力者」（韓国側は「共同研究者」）として研究活動に参加し、論文を執筆しています。

この報告書は、関係者・機関および全国の主な国公立図書館と大学、短大の付属図書館など約1200か所に配布しました。また、当基金のホームページ上でも内容を公開しています（<http://www.jkcf.or.jp/history/>）。

研究委員		※日本側一五十音順、韓国側一指定順（職位は研究期間終了時）			
委員長		鳥海 靖	東京大学 名誉教授	趙 珖	高麗大学校文科大学 教授
委 員	第1分科会 (古代)	坂上 康俊 濱田 耕策 森 公章	九州大学大学院人文科学研究院 教授 九州大学大学院人文科学研究院 教授 東洋大学文学部 教授	金 泰 植 盧 泰 敦 趙 法 鍾	弘益大学校師範大学 教授 ソウル大学校人文大学 教授 又石大学校師範大学 教授
	第2分科会 (中近世)	桑野 栄治 佐伯 弘次 須川 英徳	久留米大学文学部 准教授 九州大学大学院人文科学研究院 教授 横浜国立大学教育人間科学部 教授	孫 承 喆 李 啓 煌 韓 明 基	江原大学校人文大学 教授 仁荷大学校文科大学 教授 明知大学校人文大学 教授
	第3分科会 (近現代)	有馬 學 大西 裕 原田 環 春木 育美	九州大学 名誉教授 神戸大学大学院法学研究科 教授 県立広島大学人間文化学部 教授 東洋英和女学院大学国際社会学部 専任講師	朱 鎮 五 柳 承 烈 河 棕 文 李 碩 祐	祥明大学校人文社会科学大学 教授 江原大学校師範大学 教授 韓神大学校社会科学大学 教授 仁荷大学校法学専門大学院 副教授
	教科書 小グループ	木村 幹 重村 智計 永島 広紀 古田 博司 山内 昌之 山室 建徳	神戸大学大学院国際協力研究科 教授 早稲田大学国際教養学院 教授 佐賀大学文化教育学部 准教授 筑波大学大学院人文社会科学部 教授 東京大学大学院総合文化研究科 教授 帝京大学理工学部 准教授	李 讚 熙 鄭 在 貞 金 度 亨 鄭 鎮 星 玄 明 喆 辛 珠 柏	韓国教育開発院 碩座研究委員 ソウル市立大学校人文大学 教授 延世大学校文科大学 教授 ソウル大学校社会科学大学 教授 京畿高等学校 教師 延世大学校国学研究院 HK研究教授



第2期日韓歴史共同研究報告書

日韓歴史相互理解に向けて

第2期日韓歴史共同研究は、2年半余りに及ぶ活動を終了し、その成果として、2010（平成22）年3月、あわせて4分冊・2000頁を超える部厚い研究報告書が公開・刊行された。

日本側委員長の私がもっとも重要と考えたのは、この委員会を政治・外交問題とは切り離して、あくまでアカデミックな学術共同研究として運営することであった。こうした共同研究の基本的あり方は、2007年4月、全体会議の準備のためにソウルで開かれた韓国側趙珖委員長との予備会談において合意に達した。

この共同研究の大きな目的は、日韓両国間の歴史相互理解を深めることにあった。言うまでもなく、歴史には「唯一の正しい理解」が存在するわけではない。



第5回全体会議（2009年11月、ソウル）

ある特定の歴史事象についても、いろいろな視点に立って、さまざまに異なった理解・解釈が共存するのは当然である。したがって、日韓双方に共通の統一的历史理解を求めることが、本共同研究の主たる目的とはいえない。むしろ「違いは違いとして」相互に率直に受け止め、その理由や背景、学問的関心のあり

方の相違点などについて、自由かつ活発な討論・対話を通じて検討することが重要なのである。その意味からすれば、日韓双方の意見が喰い違い、共通の認識が成立しなかったとして、この歴史共同研究の意義を否定するのは、あまりに早計であり当を得ないであろう。

世界における 歴史対話の経験から

今日、世界の多くの国や地域で、歴史の相互理解を深めようとするプロジェクトが進行している。私自身、1970年代後半から30年余りNGOの一員としてこうしたプロジェクトに参加し、アメリカ合衆国・ヨーロッパ諸国・韓国・中国・東南アジア諸国などの歴史家・歴史教育家と対話を重ねてきた。その大部分が、過去における日本の戦争相手国や日本が植民地支配したり占領したりした国や地域の人々であった。それだけに、時にはそれが政治問題と結びついて軋轢を招いたり、相手側の歴史理解が日本人の常識的理解と大きく喰い違って驚かされたりしたことも少なくなかった。

しかし一方で、そうした困難にも拘わ

らず、互いに相手側の見解を一方的に排除したり、自らの歴史認識を押しついたりすることなく、異なった見方や意見にじっくりと耳を傾け、歴史相互理解を深めるための地道な努力を続けたことが、大きな成果を生んだ点も認めてよいであろう。

今回の日韓歴史共同研究においても、数多く発表された双方の研究論文・報告を通じて、互いの論点の違いが具体的に明らかになったことは、一つの成果と言えるよう。

この種の歴史共同研究では、一国史・一民族史を超えた広い国際的視野が不可欠である。そしてまた、共同研究の成果が十分に確認されるためには、かなり長期的な時間の経過が必要であろう。そうした息の長い視点を無視して、性急かつ安易に歴史共同研究について云々することは、厳に戒めなければなるまい。

最後に、第2期日韓歴史共同研究を終えるにあたって、さまざまな困難を乗り越えて、これを完結させることに努力してくださった韓国側趙珖委員長をはじめ日韓両国委員、研究協力者、両国政府関係者、両国事務局の方々に深い感謝の意を表したい。

PROFILE

鳥海 靖
とりうみ やすし



東京出身。東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻に学ぶ。東京大学教養学部・同大学院総合文化研究科教授、中央大学文学部教授を経て、現在東京大学名誉教授。専門は日本近現代史、国際間歴史相互理解。

2010年度訪日・訪韓研究支援（フェローシップ）の採用者が決定しました。
訪日68名、訪韓10名の応募があり、このうち訪日は15名、訪韓は4名が採用されました。

訪日フェロー一覧

No.	氏名	所属・職位	研究テーマ	受入機関	開始日 終了日
1	康成源	ソウル大学校 工学研究所 主任研究員	東アジア様式建築の保存理論と修復技術の 在り方に関する日韓比較研究	東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター	2010.7.1 2011.5.31
2	金晟澤	シカゴ大学大学院 歴史学科博士課程	連合国占領期における民間情報教育局(CIE)の ラジオに対する指導とNHKラジオ娯楽放送	東京大学大学院 情報学環・学際情報学府	2010.11.1 2011.9.30
3	金順任	国立国語院 公共言語支援団 学芸研究士	日本語と韓国語のサービス業界の 敬語使用に関する対照研究	明海大学外国語学部	2010.4.1 2011.2.28
4	金庸珏	釜山外国語大学校 ビジネス日本語学部助教授	実践的日本語能力向上のための言語文化 教育のあり方に関する研究 —韓国入学者向けの語彙教育のあり方を中心に—	名古屋外国語大学 外国語学部日本語学科	2010.4.1 2011.2.28
5	金孝珍	中央日報 戦略企画担当 戦略チーム次長	安保制度化の政治経済学: 朝鮮半島エネルギー開発機構の興亡を中心に	早稲田大学アジア研究機構	2010.10.1 2011.8.31
6	柳尚潤	ソウル大学校 社会科学部経済学部 BK21 博士後研究員	東アジア地域経済の発展と朝鮮織物業	東京大学大学院 経済学研究科	2010.4.1 2011.2.28
7	朴薫	ソウル市立大学校 法学専門大学院副教授	日本と韓国の非営利法人と 寄附金制度に関する研究	東京大学大学院 法学政治学研究科	2010.4.1 2011.2.28
8	徐旺佑	東京藝術大学大学院 美術研究科文化財保存学 専攻博士課程	歴史的遺産を生かした都市景観再生と 文化財保護の手法に関する日韓比較研究	東京藝術大学大学院 美術研究科文化財保存学 専攻保存修復建造物研究室	2010.4.1 2011.2.28
9	孫承喆	江原大学校 人文大学史学科教授	『朝鮮王朝実録』に収録されている 中世日本の人名・地名に関する研究	九州大学大学院 人文科学研究院	2010.5.1 2010.7.31
10	呂寅満	江陵原州大学校 社会科学部 国際通商学科助教授	経済発展における産業政策と企業の役割 —日韓比較を中心に—	東京大学大学院 経済学研究科	2010.8.1 2011.6.30
11	李炳鎬	国立中央博物館学芸研究室 歴史部学芸研究官	百済と日本の古代仏教寺院の比較研究 —瓦当と伽藍配置を中心に—	奈良県立橿原考古学研究所	2010.9.1 2011.7.31
12	李慧眞	韓国外国語大学大学院 国語国文学科非常勤講師	植民地末期・朝鮮の歴史哲学者たちの 学知と昭和批評の問題 —徐寅植、金午星、朴致祐、申南徹を中心に—	東京外国語大学大学院 総合国際学研究院	2010.4.1 2011.2.28
13	鄭琮樺	韓国映像資料院 韓国映画史研究所研究員	植民地期朝鮮と日本の比較映画史的考察	京都大学人文科学研究所	2010.9.1 2011.7.31
14	趙賢貞	東京藝術大学大学院 美術研究科 文化財保存学専攻博士課程	木造建造物における部材の保存学技術と 修復技法に関する研究	東京藝術大学大学院 美術研究科文化財保存学 専攻保存修復建造物研究室	2010.4.15 2011.3.15
15	韓正美	韓国外国語大学校 日本語大学 日本学部非常勤講師	物語文学と神々の変貌	東京大学大学院 総合文化研究科	2010.4.1 2011.2.27

訪韓フェロー一覧

No.	氏名	所属・職位	研究テーマ	受入機関	開始日 終了日
1	小林聡明	大阪市立大学 都市文化研究センター研究員	米軍政期南朝鮮における情報政策研究 —「南北統一」言説の統制と普及をめぐる—	ソウル大学校 言論情報研究所	2010.4.1 2011.2.28
2	林 史樹	神田外国語大学外国語学部 韓国語学科准教授	韓国における漢方医療の変遷過程と近代以降の 健康観の変化：忠清南道錦山地域を中心に	中央大学校 韓日文化研究院	2010.4.5 2011.3.4
3	蓑原俊洋	神戸大学大学院 法学研究科教授	対米政策をめぐる日韓の比較研究: 安全保障と経済を中心に	ソウル大学校 社会科学部外交学科	2010.7.20 2010.9.20
4	安田純也	滋賀県立大学大学院 博士課程修了	高麗王朝における仏事体系の研究 —郡県制との関連を手がかりとして—	国民大学校 文科大学国史学科	2010.4.1 2010.9.15

はじめに

最近、韓国が韓日経済交流において最も気にしているのは、毎年増加している対日貿易赤字である。対日貿易赤字は、韓日国交正常化があった1965年の1億3000ドルから2008年には過去最大の327億ドルにまで拡大した。ここで注目したいのは韓国の完成品の輸出が増加すればするほど対日貿易赤字も増加する産業構造になっていることだ。

世界経済不況で韓国企業の輸出が鈍化した2009年には、対日貿易赤字も前年より大幅に減少し276億ドルとなった。また、最近日本のメディアがよく取上げている韓国を代表する「PHS(Posco・Hyundai・Samsung)・LGの躍進により、世界経済不況の中でも輸出が増加している(2009年12月の輸出と輸入は前年同月比の33.7%で24.0%増となった)。そして2010年も対日貿易赤字の大幅な増加が予想されている。

資源が乏しい韓国が原材料を輸入加工して輸出する産業構造を持っている以上、輸出の増加に伴う輸入の増加は当たり前の話である。しかし、韓国が対日貿易赤字を気にしているのは、対日輸入品のなかで最も大きな割合を占めているのが他の国との貿易では黒字となっている部品素材であるからだ。2008年の場合は対日貿易赤字の327億ドルの中で、部品素材が209億ドル(過去最大)を占めていた。

1970年代から韓国は部品素材の対日貿易赤字の拡大に対し、国のレベルでさまざまな政策を講じてきた。しかし、2006年5月「韓国部品素材振興院」の調査によると、米国の部品素材産業の競争力を100とした場合、日本は98.5、韓国は85であった。韓国の部品素材産

業の競争力がかなりのレベルまで日本を追い上げてはいるものの、その差が縮まらないのはなぜなのか。韓国が日本との差を縮めるのにはどのような政策をとるべきか。そのカギとして東京大学の藤本隆宏教授の「ものづくり組織能力の構築メカニズム」に注目している。

私が韓国の部品素材の対日貿易赤字の問題に関心を持つ理由は、私が現在勤めている「韓日産業技術協力財団」が、1992年の韓日首脳会談を受けて、対日貿易赤字の縮小を目的に設立されたことと関係がある。

技術中心の韓国の部品
素材産業の競争力強化政策と
その課題

韓国政府が部品素材産業の競争力を強化するために講じた政策は、時代別に大きく三つに分けられる。まず、1970年代は重化学・鉄鋼などの基幹産業に必要な部品素材を国産化するために、主な部品素材の輸入を制限する政策を行った。部品素材の国産化が部品素材中小企業の技術力向上に寄与したことは否定できないが、市場での企業間競争による技術力向上ではなく、基幹産業での大企業を育成する目的で政府が国産率と国産化企業まで指定した人為的な政策であった。これは部品素材中小企業が資本力と技術力を自ら築き上げることができず、大企業へ従属的に系列化する背景となった。

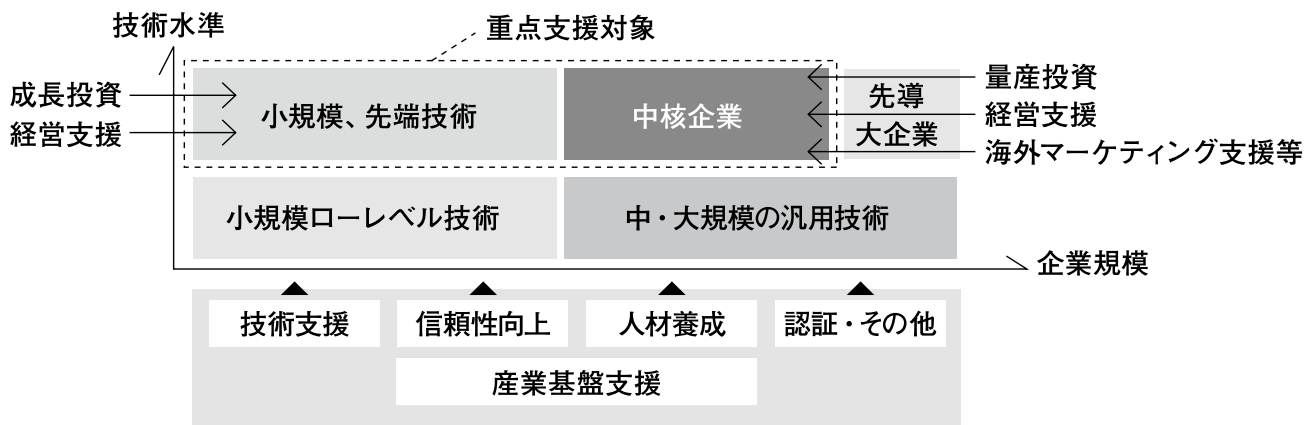
二番目は1980～90年代に行った第2段階の部品素材の国産化政策である。特に1987～95年は輸入先の多角化制度を通じた輸入抑制及び機械部品・素材の国産化政策、1995～99年は資本財産業の育成を中心とした政策を行った。この政策は短期的に商用化可能な中・低レベルの技術を中心とした汎用製品を集

中の支援したので、鉄鋼と基礎化学素材などの汎用の部品素材の輸入代替の効果はあった。しかし、過度な市場保護政策により部品素材中小企業の国際競争力の向上には程遠い結果となった。高度経済成長期の20年間の部品素材産業の競争力の強化政策は、部品素材中小企業の競争力より、それを基盤とした輸出主導の大企業を育成する狙いが強かったのではないと思われる。

三番目は2000年代以後の部品素材産業の国際競争力の強化政策である。韓国で本当の意味での部品素材中小企業の競争力の強化政策が取られたのはこの時期からだと言える。1997年のIMF経済危機後、急速な市場開放により本格的にグローバルな競争に入ると、今までの保護中心の政策が維持できなくなった。また、グローバルな競争に勝つため、完成品メーカーも高付加価値の製品生産のために高品質の部品素材を求めるようになった。

そして、韓国政府は2001年「部品素材専門企業などの育成に関する特別措置法」を制定し、部品素材の低技術水準からの脱皮を目標に、国レベルで部品素材中小企業の競争力の強化政策に取り組んだ。さらに「部品素材発展基本計画」を立て、競争力のある部品素材企業の技術開発に集中した政策を行った。また、政府傘下に「韓国部品素材振興院(2009年5月に韓国産業技術振興院に吸収・統合)」を設立し、部品素材企業の競争力向上のための総合的な支援を行っている。2005年からは先端技術を持っている小規模企業と中核部品素材企業を集中的に育成する政策を実施している(5ページの図参照)。また、2009年11月に「部品素材の競争力の総合対策」を樹立し、そのアクションプランとして2010年4月に世界市場を牽引する10の素材

2005年以降の部品素材産業育成政策

出典：部品素材知識情報プラットフォーム、<http://mctwide.kmac.or.kr/>

品目と20の部品品目を指定し、その開発に2018年まで総額1兆2000億ウォンを支援することを発表した。韓国の部品素材産業に対する競争力強化政策は、全体的に政府主導による技術を中心としたものと言えるだろう。

部品素材産業の環境変化と 部品素材中小企業のものづくり 組織能力強化政策の必要性

近年、部品素材産業を取り巻く環境が激しく変化している。完成品の組み立ての生産能力が世界的に標準化され、完成品メーカーはさらに高付加価値の部品素材を求めている。また、核心部品素材の供給においては、インテル、デンソー、ボッシュなどグローバルな部品素材企業が世界市場でシェアを拡大している。韓国の部品素材市場では大企業と中小企業の二極化がさらに拡大している（部品素材企業全体の0.9%に過ぎない大企業が生産の44.5%を占めている）。しかし、韓国の部品素材産業では99.1%が従業員数5人以上300人以下の中小企業であり、対日貿易赤字の問題だけでなくマクロ経済問題からも部品素材中小企業の

競争力の強化が注目を集めている。

韓日産業技術協力財団と日韓産業技術協力財団は、共同で数年にわたって、日本の技術者による韓国部品素材中小企業の現場への技術指導事業を行っている。現場指導に参加した日本の技術者たちは、日本では当たり前になっている現場改善、整理・整頓・清潔などが、韓国ではその認識が薄く、技術力さえあれば他社との差がつけられると思っている場合が多かったと言う。これはまさに韓国と日本の「ものづくり組織能力」の差であり、韓国が国のレベルで部品素材産業の競争力の強化政策を行っているにも拘わらず、なかなか日本との差が縮まらない理由でもある。

藤本隆宏は競争戦略論において企業間の競争力や収益性の差を説明する概念として、企業特有の能力である「組織能力」を重視しており、特に他社が簡単に真似できない開発や生産の現場に顕現する組織能力を「ものづくり組織能力」と呼んでいる。これは顧客へ向かう設計情報の創造・転写・発信のプロセスを、競合他社よりも正確に（高品質に）、効率よく（低コストで）、迅速に（短いリードタイムで）遂行する組織全体の實力を指

し、いわゆるQCD（品質・コスト・納期）の同時達成と同時改善を行う能力である（藤本隆宏『生産マネジメント入門！生産システム編』日本経済新聞社2001）。

従って、部品素材市場の国内外の環境変化に対して韓国の部品素材中小企業のものづくり競争力をさらに強化するためには、部品素材中小企業の現場のものづくり組織能力を強化する環境づくり政策（現場の問題解決能力をもつ人材育成、5S運動〔整理、整頓、清掃、清潔、躰〕など）が講じられるべきではないだろうか。

PROFILE

金 度 勲
キム ドフン



韓日産業技術協力財団日本企業研究センター研究委員。現在、東京大学大学院経済研究科ものづくり経営研究センター客員研究員。主な研究テーマ：ものづくり経営、中小企業、リスクマネジメント

日韓文化交流基金では韓国青少年団体協議会と共同で、日韓両国がともに取り組むべき課題である環境問題をテーマに、「日韓青少年共同ボランティア活動事業」（訪日・訪韓プログラム）を企画・実施しました。環境問題に高い関心を持つ両国青年が参加し、ボランティア活動やディスカッションなどを行いました。



鳥取・賀露みなと海水浴場での清掃活動

今回の事業は両国の未来志向の関係を強化するための交流事業として企画され、「環境」をメインテーマにした共同のボランティア活動が、プログラムの核になっているという点に特色があります。まず3月9日から15日まで韓国の青少年団体の若手指導者や大学生の一行25名による訪日プログラムを実施し、続いて3月23日から29日まで、日本の大学生ほか26名による訪韓プログラムを実施しました。

7日間にわたる訪日・訪韓プログラムは、岡田克也外務大臣・柳明桓外交通商部長官への表敬訪問にはじまり、東京・鳥取・京都（訪日）、ソウル・浦項・慶州（訪韓）など、各地で環境問題に取り組む施設などを見学しながら、双方の国の環境対策や文化への理解を深めました。

韓国青年の一行は、鳥取環境大学で海ゴミ研究に関する特別講義を受け、海の生物に被害を及ぼす海ゴミ問題の実態を学んだあと、同大学の学生たち16名と一緒に、鳥取・賀露みなと海水浴場で清掃活動を行い、ペットボトルや空き缶・瓶、漁具など300kg近いゴミを回収しました。続いて、両国の参加者は「海ゴミ問題に関して両国の青少年が共同で何ができるか」をテーマに話し合い、「日韓共同ゴミ拾い日の設定」、「子ども向け

のアニメを利用した環境教育の開発」、「海ゴミ回収者へのエコポイント付与」など、ユニークなアイデアが出されました。

一方、訪韓プログラムの日本大学生の一行は、韓国の大学生20名と「環境セミナー」を開催し、両国の学生代表による環境問題に関するプ

レゼンテーションと、全体討論を行いました。また、自治体が取り組む環境問題の事例として、浦項市の環境政策に関するレクチャーを受け、九龍浦海岸・防波堤で日韓の学生が共同で清掃活動を行いました。

参加した両国青年にとって、今回の訪日・訪韓プログラムのボランティア活動は、報道や資料など間接的に触れていた海ゴミ問題を身近な環境問題として感じられる機会となりました。

「どこの国が出したゴミということではなく、みんながゴミを出さないよう心がけることが大切だ」

「一時的な活動で終わらず、帰国後も環境問題にかかわっていきたい」

「自分自身はもちろんのこと、周りの人たちにも関心をもってもらえるようにしたい」

といった参加者からの感想には、持続的な環境問題への取り組みに対する決意と、相手の国や人への理解と共感がこめられているように思われます。



浦項市ではNGOが運営する「環境学校」を訪問。ゲームを使った教育プログラムを体験した

主要日程

訪日プログラム	訪韓プログラム
3/9 (火) 羽田空港着、訪日研修オリエンテーション	3/23 (火) 金浦空港着、訪韓研修オリエンテーション、外交通商部・柳明桓外交通商部長官表敬訪問、歓迎夕食会
3/10 (水) 外務省・岡田克也外務大臣表敬訪問、歓迎昼食会、六本木ヒルズ（耐震技術、ヒートアイランド対策）見学	3/24 (水) 浦項へ移動、浦項市庁訪問（市政概要説明、環境政策紹介）、歓迎夕食会
3/11 (木) 鳥取へ移動、鳥取環境大学訪問（古澤巖学長表敬、施設見学、荒田鉄二准教授による特別講義、両国学生による環境活動報告）、歓迎夕食会	3/25 (木) posco、環境学校見学、日韓環境セミナー
3/12 (金) 賀露海岸清掃活動、意見交換会	3/26 (金) 九龍浦海岸清掃活動、旧日本人居住区、浦項知能ロボット研究所、虎尾岬見学
3/13 (土) 京都へ移動、京エコロジーセンター見学	3/27 (土) 慶州へ移動、仏国寺、天馬塚見学、ソウルへ移動
3/14 (日) 金閣寺、二条城、清水寺見学、友禅染体験	3/28 (日) ソウル市内グループ別見学
3/15 (月) 関西国際空港より帰国	3/29 (月) 金浦空港、仁川空港より帰国

世代間問題としての海ゴミ問題

訪日プログラム特別講義講師 鳥取環境大学環境マネジメント学科准教授
荒田 鉄二

日本では、海ゴミ問題というと、島根県、石川県、秋田県などの日本海側の地域に海外から漂着するゴミの問題に注目が集まり、海ゴミの発生源地域（海外）と被害地域（日本）という「地域間の問題」として捉えられがちです。確かにこれも海ゴミ問題の一側面なのですが、海ゴミ問題には「世代間の問題」という、より本質的な面があります。数でも重量でも海岸に漂着する海ゴミの大半はプラスチック類です。石油からつくられるプラスチックは生分解しないため、一旦放出されると、環境中に蓄積していきます。しかし、プラスチックは生分解しないものの、紫外線などの影響により次第に劣化してろくなり、波の物理的作用などにより細かく破碎されていきます。そして砂粒のようになったプラスチックは、回収しようにも拾い集めることはほとんど

不可能となります。また、プラスチックゴミは細くなればなるほど、環境中に拡散しやすくなっていきます。現代生活では、至るところにプラスチック製品が溢れており、プラスチックなしの生活など考えられないほどですが、このままいくと、私たち現代世代は、将来世代に回収不能のプラスチックで汚染された海を残すことになります。

海岸に漂着するゴミの多くは、ペットボトルなど、陸上での日常生活に起源を持つプラスチック製の容器包装類です。海ゴミ問題の解決に向けては、海ゴミとなるようなプラスチックゴミをそもそも発生させないことが最も重要ですが、それと同時に、海岸に漂着したプラスチックゴミについては、拾えるうちに拾っておくことも重要です。3月12日に鳥取市の海岸で実施した海岸清掃では、日韓

合わせて約40名の若者からなるボランティアが、1時間で約300kgの海ゴミを回収してくれました。今回、海ゴミ問題について共に学び、清掃活動を行った日韓の若者たちの中から、海ゴミ問題を「世代間の問題」として捉え、その解決に向けて取り組む活動が広がっていくことを期待しています。

PROFILE

荒田 鉄二
あらた てつじ



2009年度より鳥取環境大学の海ゴミ研究プロジェクト（日本海に面した海岸における海ゴミの発生抑制と回収処理の促進に関する研究）に携わる。専門は地球環境問題の文明論的研究。

訪韓プログラムに参加した日本の学生の声（学年はプログラム参加当時）



前田 沙世
まえだ さよ

宮崎公立大学
人文学部
国際文化学科2年

自分にとって今回の日韓青少年共同ボランティア活動は、「ビビンバ」のように、よく「混ざった」1週間であった。

韓国に到着した日から日韓両国の学生はすぐに打ち解け、移動中も食事の時も笑顔が絶えなかった。韓国語・日本語・英語を「混ぜ」て、一生懸命会話を試みる風景があちこちで見られ、最終日には立派な日韓青少年共同「ビビンバ」ができ上がっていた。

今回の訪韓では行く先々でいろいろな話を聞き、貴重な体験をした。ここでしかない人々との出会いもあった。この1週間の糧に私なりに調理した「ビビンバ」を



浦項市主催歓迎夕食会で挨拶する前田さん

食べ、今後の日韓関係を支えていけるように、韓国語の学習を続けると同時に、今回出会った人々との交流も続けていきたいと思う。



長 毅
おさ たけし

鳥取環境大学
環境情報学部
環境デザイン学科2年

今回のプログラムでさまざまな行事に参加し、貴重な経験をすることができ、本当によかったと思う。一番の収穫は日韓あわせて42人の仲間ができたことである。みんなで語り合い、お互いの理解を深めることができた。大学生活の話やお互いの夢の話、日韓の国際問題についても冷静に語り合うことができた。

私は、青少年が交流する意義は、私たちの世代の感情や考え方が社会をつくる時が必ず来ることにあると思う。率直に意見交換できる若い時期に交流することで、友人としてお互いを認めることができる。私たちが社会を担う世代になったとき、日韓の間に横たわっている問題を解決できるのではないかという自信を持てるほど、彼らを信頼できた。また、お互いに刺激しあい、ライバルとして努力していこうという思いを持つことができた。プログラムでできた一生の仲間、思い出を胸に、これからも頑張っていきたいと思う。

2010 年度助成対象事業には 103 件の申請があり、この中から 47 件への助成が決定しました。

青少年・草の根交流（日韓共同未来プロジェクト） 31件

事業名	申請団体	実施期間	場所
エイブル・アート日韓展	財団法人 たんぽぽの家	4/1～8/31	京畿道内、東京など
日韓子どもシンポジウム	社団法人 釜山韓日文化交流協会	4/5～11/30	釜山市、福岡市
『旅行者』日韓合同プロジェクト	特定非営利活動法人 劇研	4/18～7/12	江原道・フヨンパフォーミングアーツセンター、京都・アトリエ劇研
日韓文化交流事業展ロボットアートとあそびの世界展 ～江戸時代のからくりから現代のロボットまで～	からくり文化実行委員会	4/21～5/24	京畿道・城南アートセンター
めっちゃサランヘヨ！ノムノム愛してる！ “함께=ともに” Talk Live in なごや1910⇒2010⇒	“함께 =ともに” 高校生平和 特派員実行委員会	5/2～7/26	名古屋市、ソウル市、全州市
南北 코리아 と日本のともだち展2010	南北 코리아 と日本のともだち展 実行委員会	5/13～16、 12/2～5	在日本韓国YMCAアジア青少年センター、こどもの城、国立オリンピック記念青少年総合センター
日韓子ども国際交流体験2010	日韓子ども国際交流体験実行 委員会	7/23～26、 8/20～23	光陽製鉄南初等学校、長崎市、諫早市
2010ー帯広ー堤川 日韓美術文化交流事業	平原社美術協会	7/23～8/3	帯広市民ギャラリー
名護屋小学校萬徳初等学校ホームステイ交流事業	名護屋小学校 PTA	7/27～31(訪韓)、 8/24～26(訪日)	全羅南道萬徳初等学校、唐津市
日韓小学生親善交流事業	堺バスケットボール協会	7/29～8/2	仁川市
日韓こども湿地交流～COP10がつなぐ夢飛翔～	特定非営利活動法人 藤前干潟 を守る会	7/31～8/3(訪韓)、 10/22～25(訪日)	慶尚南道・牛浦沼注南貯水池、愛知・藤前 干潟
第49期日韓学生交流プログラム	日韓女性親善協会	8月	韓国
2010丹波市・日韓少年サッカー交流	春日フットボールクラブ	8/6～9	兵庫県丹波市春日町(春日中学校など)
第26回日韓学生フォーラム	第 26 回日韓学生フォーラム 実行委員会	8/8～22	ソウル市、釜山市(予定)
デフ・パペットシアター・ひとみ『はこ/BOXESじいちゃん のオルゴール』公演および韓国聾啞連盟との交流会	財団法人 現代人形劇センター	8/12～14	水原華城国際演劇祭、ソウル市内など
日韓獣医学生交流プログラム	日本獣医学生協会	8/12～16(訪韓)、 8/19～25(訪日)	ソウル市、大阪市
日韓青少年交流～田舎へ泊まろう～	特定非営利活動法人 地球市民の会	8/17～25	佐賀市・富士町、三瀬
日韓友好交流ボランティアワークキャンプ2010	特定非営利活動法人グッド	8/18～30	原州市
日韓未来構築フォーラムー誠信学生交流2010	早稲田大学アジア研究機構	8/19～21	山梨県北杜市
韓国の子どもたちとハングルを使って、日韓伝統文化の 体験交流をしよう。	立石小学校 韓国友の会	8/23～25	釜山・トンジュ初等学校
LEAFフォーラム2010日本セッション	LEAF 日本実行委員会	9/26～10/2	国立オリンピック記念青少年総合センタ ー、東京大学
人形劇日韓合同公演 「魔女になりたがりやの小さなネズミ」ほか	人形劇場だぶだぶ	10月	ソウル市、金浦市、仁川市
Kids' Asian Union Camp 2010 in Japan	特定非営利活動法人 こどもたちの アジア連合 (Kids' Asian Union)	10/4～9	名古屋市、長野県下伊那郡泰阜村および その周辺
日韓交流おまつり・百済文化祭参加事業	美郷町役場	10/8～11	ソウル市、忠清南道扶余郡扶余邑
「日韓交流おまつり2010 in SEOUL」 秋田竿燈まつり派遣事業	秋田市竿燈まつり実行委員会	10/9～10	ソウル市

青森・韓国ねぶた交流事業	青森空港国際化促進協議会	10/9~10、 11/11~14	ソウル市
「三國G」日韓中東洋画交流展 東京藝術大学、 ソウル大学校、中央美術学院国際交流事業	東京藝術大学美術学部絵画科 日本画研究室三国 G 実行委員会	10/15~23(訪韓)、 11/4~13(訪日)	KEPCO Plaza Gallery、韓国文化院
第11回日韓学生シンポジウム	東北大学大学院環境科学 研究科川田研究室	10/21~25	ソウル大学校
第2回ワールドカップ身体障害者野球日本大会	日本身体障害者野球連盟	11/5~8	神戸市スカイマークスタジアム、しあわせの村研 修館、兵庫県立総合リハビリテーションセンター
第3回日韓次世代交流映画祭 (プレイベント「第1回日韓学生シネマフェスタ」を含む)	「日韓次世代交流映画祭」 実行委員会	11/7(プレイベント)、 12/10~12	別府市
韓国現代戯曲ドラマリーディングvol.5及びシンポジウム 「韓国演劇を語る(仮題)」	日韓演劇交流センター	2011/2/25~27	東京都・シアタートラム

シンポジウム・国際会議 8件

事業名	申請団体	実施期間	場所
第16回日韓美学研究会、第5回東方美学研究会 合同国際研究会	広島比較美学研究会	4/1~4	広島大学、宮島、倉敷
陵墓からみた東アジア諸国の位相 —朝鮮王陵とその周縁—	関西大学文化交渉学 教育研究拠点	6/25~26	高麗大学校
日韓文学交流の現在・過去・未来—李箱(イ・サン)生誕 100周年記念国際学術シンポジウム	武蔵大学総合研究所	7/16~17	武蔵大学
日韓合同授業研究会第16回交流会 済州道大会	日韓合同授業研究会	8/6~9	済州道・水山里村会館
第4回日韓戦略協力対話	財団法人 平和・安全保障研究所	10/6~8	ソウル市
第23回東京国際女性映画祭	東京国際女性映画祭 実行委員会	10/23~27	東京ウィメンズプラザ
日韓言語学者会議 —韓国語を通じた日韓両国の相互理解と共生—	麗澤大学	11/12~14	麗澤大学廣池千九郎記念講堂
東京芸術見本市2011in 横浜「舞台芸術制作者ネットワーク会議」(仮)及びコンテンツ ラリー・パフォーミング・アーツ国際ネットワーク会議IETM@TPAM in Yokohama(仮)	NPO 法人 国際舞台芸術交流センター	2011/2/14~19	神奈川芸術劇場

芸術交流 8件

事業名	申請団体	実施期間	場所
キラリと世界で創る芝居vol.1 ☆韓国【LOVE THE WORLD 2010】	財団法人 富士見市施設管理公社	4/23~27	富士見市民会館キラリ☆ふじみ
音楽劇~もう一つのシルクロード2010韓国版	民俗工房	6/8~9	国立国学院礼楽堂
日韓中「友情の花束コンサート」(仮)	日韓「友情の花束」 実行委員会	8/19~23	新宿区角筈区民ホール、 柏木出張センター
笑福亭銀瓶韓国語落語公演	松竹芸能株式会社	10/1~7	昌原、ソウルほか
競演東西南北(アリスフェスティバル2010)	NPO ARC タイニイアリス	10/1~2011/2/27	東京都・小劇場タイニイアリス
「歌舞伎のいろは一日高川」韓国公演	舞藝舎	10/4~8	中央大学校(ソウル)
日韓アートリレー2010	die prätze	10/19~11/24	東京都・d・倉庫
劇団態変『ファン・ウンド潜伏期』韓国公演	劇団態変	2011/3/15~26	ソウル市・韓国文化の家、 固城五広大伝授会館

01 | 青少年交流事業

訪日団						
団体名	団 長	計	男	女	期 間	訪問校
韓国青年 (第1団)	李秉鎭 世宗大学校日語日文学科 教授	29	6	23	1/5～14	横浜国立大学
韓国青年 (第2団)	朴載燮 仁済大学校国語国文学科 教授	30	8	22	1/5～14	津田塾大学
韓国青年 (第3団)	蘇明仙 済州大学校日語日文学科 教授	29	8	21	1/5～14	明治学院大学



横浜国立大学でのディスカッション
(韓国青年第1団)



津田塾大学での日韓ディバートの様子
(韓国青年第2団)



浅草で屏風作りを体験
(韓国青年第3団)

訪韓団						
団体名	団 長	計	男	女	期 間	訪問校
日本大学生 (第1団)	渡辺直紀 武蔵大学人文学部 准教授	19	9	10	3/2～11	ソウル市立大学校 嶺南大学校
日本大学生 (第2団)	本田洋 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授	20	9	11	3/16～25	慶熙大学校 釜山外国語大学校



嶺南大学校でのサムルノリ体験学習
(日本大学生第1団)



韓国の茶道を体験
(日本大学生第2団)

02 | 官民若手交流事業

3/17~21	李春植議員・張済元議員・洪永杓議員
3/24~28	洪政旭議員・具相燦議員・権泳臻議員・秦聖昊議員

上記7名が来日し、外務副大臣表敬、政府関係者および企業関係者との面談、国会および産業・文化施設の視察を行いました。

03 | 「日韓高校生交流キャンプ」「日韓学生未来会議」

社団法人日韓経済協会への委託事業で、日韓の高校生が合宿形式で交流する「第14回日韓高校生交流キャンプ」が2月2～6日の4泊5日間、大阪市で開催されました。今回のキャンプには、日本側から39名、韓国側から49名の高校生が参加しました。このキャンプでは、事前に各参加者に対し取り組みたい日韓の文化や観光を題材にした事業分野の希望をとり、日韓の混成チームを10チーム編成、それぞれがビジネス企画を作成して発表します。

キャンプ初日には、自己紹介を終えた後に早速日本語、韓国語、英語を交えながら事業企画の選定について相談を開始。2日目にはチームごとに大阪市内の繁華街で、「市場調査」を実施し、調査の結果を検討した上で、4日目に「事業発表会」を開催しました。最優秀賞には、インターネット上に自分の分身（アバター）を作って日韓の化粧品や衣料品等の買い物をするという事業を企画したチームが選ばれました。参加者たちは、発表準備の過程での真摯な議論などのほか、両国の伝統文化体験やクイズ大会など密度の濃いプログラムを通じて友情を築き、相手国への理解を深めていました。



企画を練る日韓の混成チーム

04 | 日韓ボーイスカウト交流事業

（財）ボーイスカウト日本連盟へ委託している「日韓ボーイスカウト交流事業」が行われました。今年度は韓国ボーイスカウト153名（スカウト132名、指導者21名）が、1月9日～18日の9泊10日の日程で日本を訪れました。

日本滞在中は日韓スカウトフォーラムのほか、長野でのウィンタースポーツ体験、京都での中学校・高校の訪問、関西地区でのホームステイなどを通じて交流を深めました。



グループ討論の準備

05 | 理工系大学院生研究支援

2008年度より日韓産業技術協力財団に委託し、公募で選ばれた日韓両国の理工系大学院生を対象に、大学や研究機関での研修に対する支援事業を行っています。2年目を迎えた2009年度は、日本から5名を派遣、韓国から35名を招聘し、それぞれ47日間にわたり研究機関で先端科学技術に関する研修を行いました。

06 | 交換留学生支援

2007年度より独立行政法人日本学生支援機構に事業を委託し、日韓の大学間協定による韓国人留学生を支援する事業を行っています。2009年度は201の大学に在籍する299名の留学生に奨学金を供与しました。

07 | 在サハリン韓国人留学生支援

2008年度から始まったサハリン国立大学の韓国人学生留学支援事業で、2009年度は2名の学生が九州大学で1年間の留学生活を送りました。日本語や日本文化について学び、各学部の授業を受講し、自分の研究テーマについて研究を進めました。

08 | 日韓新時代共同研究プロジェクト

3月5日～7日、韓国・光州のラマダプラザ光州ホテルで、「国際政治」「国際経済」「現在およびこれからの日韓関係」3分科合同の分科委員会が開催され、報告書についての討議が行われました。

09 | 報告書

以下の報告書が完成しました。これらの報告書は基金図書センターにおいて閲覧が可能です。

○ フェローシップ

- ・『訪日学術研究者論文集 第16巻』（2006年4月～2009年8月）
- ・『訪韓学術研究者論文集 第10巻』（2008年8月～2009年8月）

○ 青少年交流事業

- ・和歌山県中学生訪韓研修団（2009年9月13日～9月19日）報告書
- ・新潟県中学生訪韓研修団（2009年10月4日～10月10日）報告書
- ・宮城県高校生訪韓研修団（2009年10月25日～10月31日）報告書
- ・大阪府高校生訪韓研修団（2009年11月22日～11月28日）報告書
- ・日本教員訪韓研修団〈第2団〉（2009年11月17日～11月26日）報告書
- ・日本大学生訪韓研修団〈外交通商部招聘〉（2009年9月13日～9月23日）報告書

10 | 理事会

3月31日に第47回理事会および評議員会が開催され、2010（平成22）年度予算が承認されました。

11 | 維持会員

2010年1月1日～3月31日の期間に、特別会員1名、個人会員10名の方に維持会員制度にご加入いただき、19万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます（五十音順、敬称略。カッコ内の数字は2口以上の口数）。

特別会員 1名

鮫島章男

個人会員 10名

李仁子	菅野修一	金善美	小林陽太郎	三本松隆
杉山晃一	徐龍達	中江新（5）	藤本幸夫	山口晃